

トピックス②

コロナ下の高校模擬国連 オンラインでの挑戦

浅野中学・高等学校

社会科(地歴科)教諭 宮坂 武志

2020年3月、新型コロナウイルス感染拡大により日本のすべての学校が休校となり、4月には緊急事態宣言が発出されました。そのような状況の中で、模擬国連のような不特定多数の人間が一堂に会して、活発な議論をくり広げる活動ができるとはまったく想像できませんでした。「3密」に相当する模擬国連の、全国大会を運営する立場にいた一人として、8月の大会の開催は絶望視するしかなかったのです。

ところが、模擬国連に関わろうとする高校生の見立ては異なっていました。さすがにZ世代と言われるデジタル・ネイティブの高校生は、対面での活動ができないならZoomなどを利用すればいいと、あっさり頭を切り替えていたのです。なかでも模擬国連を中高生にわかりやすく広めようという思いから、経験のある高校生が組織した「もぎこみゅ！」という学生団体¹は、緊急事態宣言下の2020年4月に、Zoomでの模擬国連(4月26日)を実現させました。

「もぎこみゅ！」も当初対面での会議を企画していましたが、コロナ禍によりZoomでの会議に切り替えたとのことでした。それにしても、形式的で複雑な進行が求められる模擬国連の会議を、短時間で制約の多いオンライン上で実現してしまう高校生の熱意と機転、何よりICTの知識やスキルには驚かされました。この会議(1日会議)では、一体Zoomがどのように活かされたのでしょうか。その前にまず、模擬国連が対面でのように行われているのかをまとめておきます。

模擬国連とは何か、何が行われているのか

模擬国連は、参加者が各国大使(代表)の役を演じ、国連などの会議を設定して、事前に決定し

た議題について討議・交渉を重ねて解決策(決議案)をつくりあげる活動です。

(1) 事前に行われること

会議を運営する主催者(フロント)は議題を決め、議題の解説書(BG)²を用意し、参加者に担当国を割りふります。会議参加者は議題解説書を読み込み、担当国の政策・スタンスなどを調べてレポート(PPP)³にまとめておきます。

(2) 会議の当日(通常1日か2日で開催)

会議の目標は、議題に関する決議案(DR)⁴を作成し、投票にて採決させることです。会議の議事進行は、フロントが議長や記録係となり、大使から進め方に関する動議を受けつけながら行います。討議(ディベート)の方法は、①各大使が全体に対して行うスピーチ(フォーマル・ディベート)と、②議題について大使どうして討議・交渉する非公式討議(インフォーマル・ディベート)です。非公式討議はさらに二つに分けられ、②-(a)全員が着席した状態で、指名をうけた大使だけが発言していく形式(モデレーテッド・コーカス、通称モデ)と、②-(b)離席して自由に大使どうして討議・交渉を行う形式(アンモデレーテッド・コーカス、通称アンモデ)です。

①のスピーチが数カ国行われたところで、議長は大使から動議を募集します。ここで大使は、②-(a)のモデか、②-(b)のアンモデのどちらか(制限時間あり)を提案します。いずれかの動議が採決されると、それに従い具体的な討議が進められていきます。その後も、スピーチと動議を繰り返しながら、決議案(DR)の作成が行われていくのですが、詳しくは関連書⁵もしくは全日本高校模擬国連大会のHP⁶を参照してください。

(3) 投票はどのように行われるか

決議案に反対する国がなければ、全会一致(コンセンサス)での採択となります。しかし、1国でも反対があれば、各国の賛成・反対を確認する投票方式になります。投票が終わり、決議案が採択されてもされなくても会議はここで終了となりますが、その後、全体でのレビューにおいて会議での行動や決議案の内容、採択の可否などについて

での意見交換が行われます。

オンラインでの模擬国連はできるのか

全国高校教育模擬国連大会 (AJEMUN)⁷の準備を進めていた私たちは、当然オンラインでの開催も検討し始めました。すでに企業などがオンラインでの会議を行っていることを参考にすれば、模擬国連も実現は可能だろうと考えたのです。しかし、対面での会議なら容易にできても、オンラインでは不可能だと思われたのがアンモデという形式です。Zoom でならスピーチはできますし、モデという一人一人の大使が指名順に発言することも可能でしょう。しかし、自由気ままに参加者が話したい相手と話す、しかも複数の会話が同時に展開することになるアンモデについては、イメージできませんでした。

しかし、前述の「もぎこみゅ！」は、このアンモデを、Zoom のブレイクアウトルームを活用することで実現したのです。もちろん対面でのアンモデとは異なる面もあります。最初のアンモデで自由に会話する間に、同じスタンスの国々がグループを形成していくという流動性は、Zoom では取り入れることができません。Zoom の場合は、事前に複数のブレイクアウトルームを設け、各大使の希望を聞きながらフロントがそれぞれ入室先に移していくという手間がかかります⁸。それゆえ、最初のアンモデの前に必ずモデを行い、そのモデであらかじめどのようなグループに入りたいか、各大使が希望を表明しておくことが条件となります。これだと自由な交渉の場であるアンモデの醍醐味は軽減されます。一方で、対面での会議では雑然とした議論になりがちなアンモデが、オンラインでは各自の発言が尊重され、議論も整理されて、より深い討議と丁寧な交渉が可能となります。自由な交渉の時間という先入観を捨てて、ブレイクアウトルームという機能を、アンモデに活用した高校生の柔軟な発想に驚かされました。

これを皮切りに、以後の模擬国連はほとんど Zoom を使用した会議が主流となっていきます。「もぎこみゅ！」に続いて、6月には首都圏で大

妻高校が主催する模擬国連と、関西の私立の高校生が中心となって発足した「Let' MUN」という学生団体⁹の主催する模擬国連の会議が、いずれもオンラインで開催されました¹⁰。そして、夏休みになると各地でオンライン模擬国連が開かれ、11月の全日本高校模擬国連大会までもがオンラインでの開催となったのです。急場しのぎとしてのオンライン利用でしたが、コロナ禍が長期化する中ですっかり定着してしまいました。

オンライン会議の利点と難点

① オンライン会議の利点

- ・コロナ下でも感染の心配がない。
- ・遠隔地からでも参加が容易である。
- ・デバイスがあれば自宅からでも参加が可能で、教員の付添を必要としない。
- ・集団で同時に議論することがないので、自分の発言の機会が保障される。

② オンライン会議の難点

- ・通信回線への接続不良が起きてしまうことがある。
- ・ペアがそれぞれの自宅から参加する場合は、ペアどうしの連絡・意思疎通が難しい。
- ・長時間の会議になると画面の見過ぎで目が疲れ、座りっぱなしで腰などが痛くなる。
- ・アンモデにおいて、複数の大使と同時に議論することができない。
- ・画面越しに相手の表情を読み取りにくい。何気ない会話ができないので相手と打ち解けることが難しい。

「遠隔地からでも参加できる」という利点は、従来の対面で行われる模擬国連に参加しにくかった、地理的な制約をうける地域の中高生に対して、大きく門戸を開くこととなりました。それらの地域の中高生は、交通の便がよくないか、会場までの移動に高額な交通費がかかるなどの理由で、参加をあきらめざるを得なかったのです。全国の中高生がほぼ同一の条件で、学校の垣根を越えてつながることができるのは、オンラインならではの効果です。また、模擬国連に関する勉強会などの

ようなイベントもオンライン上で参加することができ、模擬国連のスキルやノウハウを学べるとともに、模擬国連経験者とのコネクションを作ることもできます。

一方で、オンラインならではの一般的な難点が模擬国連においてもあてはまります。「何気ない会話ができない」という点は、社会人がWeb会議やWeb面接などで感じていることではないでしょうか。画面越しでは微妙な言葉のニュアンスはもちろん、ちょっとした相槌や何気ないつぶやきなどは聞き取れません。マイクをオンにしてまで言うことでもないのに、ささやきや、自分の周囲にいる人だけに聞こえる程度の発言は控えるようになってしまいます。さらに模擬国連の場合、複数の大使が同時に議論し交渉するアンモデは、Zoomなどのようなオンライン会議システムにはなじみません。複数の発言者が同時に入り乱れて会話することが想定されていないからです。また、会話は言葉を交わすだけではないことにも気づかれます。表情に加え、仕草や動作なども交えて伝えようとしていることもあり、画面越しではこのような伝達にも限界があるのです。会話における「何気ない」という意味には、実はさまざまな意味が潜んでいたわけです。すでに誰もが実感しているように、他者と空間を共有することがどれだけ大切かをコロナ禍は教えてくれました。オンラインでは、参加者が共有できるのは時間であって、物理的な空間ではないのです。

とはいえ対面でのアンモデでは、大勢の大使が一斉に話し出すと、声の大きい大使やパフォーマンスのうまい大使ばかりがリーダー的な役割を担い、熟考型やおとなしい性格の大使が発言する機会がないという不満もありました。自分の意見が聞いてもらえないために、模擬国連は面白くないと感じてしまう生徒も少なからずいたのです。その点、オンラインでは発言する人の画面が縁どられたり、中央に位置づけられたりするなど尊重される仕組みとなっていて、対面では発言しづらかった人の声を通るようになっていきます。Zoomなどでは発言している人を遮りづらいし、誰かの

発言中に割り込んで話したくても、話し手を尊重して発言が終わるのを待つというマナーが浸透しているのではないのでしょうか。それゆえ、声が大きただけで内容の乏しい意見よりも、議題について深く掘り下げて考えられた意見が取りあげられるようになったのは、「自分の発言の機会が保障される」という以上の効果があると言えます。

このほかにも、対面であれば動議の募集や投票行動において、一斉にプラカード（国名を記したものを）をあげて賛否の表決をとっていましたが、オンラインでは画面に一度に映し出される大使の数に限りがあるため、フロントがプラカードを数えにくいという難点がありました。当初は画面越しに示されたプラカードを、フロントが画面を切り替えて数えていましたが、今ではチャット機能を活用して各大使がYes・Noを送らせる方式に変更されるなど、オンラインの利点を活かした改善も行われています。ちなみにチャット機能については、「メモ回し」にも利用されています。「メモ回し」とは、モデなど着席が義務づけられている時間に、大使どうしが「メモ」に書いたメッセージを交換することです。対面型であれば、「アドミニ」といわれるスタッフが、各大使から託されたメモを送り先に届けてくれます。オンラインでは、伝えたい大使を指定して個別にチャットを送れるので、これは「メモ回し」に便利な機能です。

また、決議案（DR）の作成も、対面型では、PCを持参できる大使が、それぞれのPCからWordファイルに打ち込んで仕上げていましたが、オンラインであれば、ドキュメントの共有によって誰でも同時進行で書き込みができます。決議案に入れる要求や提案の項目を、自ら打ち込んで挿入することが可能となるわけで、その点もオンラインのほうが、多くの大使により主体的・積極的に取り組んでもらえるという意味でよいのかもしれません。

オンライン会議ならではの課題 通信トラブル

全国高校教育模擬国連大会（AJEMUN）は、主催する側の運営スタッフの実行委員を、全国の

高校生から募集するという形式で開催しています。第4回大会（2021年1月）¹¹はオンライン会議ということで、これまでにない運営側の役割分担として、通信トラブルなどに対応できる「情報テクニカルセクション」を設けました。オンライン会議の一番の懸念は、参加者の通信環境やデバイスによって、Zoomなどへの接続がうまくいかなかったり、スキルや知識が不十分なために会議中の操作がわからなかったりするというトラブルの発生です。

この大会では会議数日前に、すべての参加者がZoomへのアクセスを試行する接続テストの機会を設けました。さらに万が一、当日になって接続できないなどのトラブルが発生した場合は、速やかに連絡がとれるよう大会公式LINEアカウントを用意して、迅速に問い合わせ・返答ができるように配慮しました。しかしながら、それでも当日の会議開始時点で、接続ができないとか音声が入らないなどのトラブルが散見されています。これらのトラブルは、ZoomのIDやパスワードの入力ミスという軽微なものから、PCなどの情報端末を別のものと交換せざるをえない例までありました。また、通信不具合により動画が固まったり音声聞こえなくなったりということもありますし、会議途中で接続が途切れて再度参加しようとしても、Zoomのホストの許可が必要なため、タイミングが合わないとしばらく待たされるということもありました。このような通信トラブルは、仕方ないこととはいえ、ともすると参加者のモチベーションを下げってしまう可能性もあります。しかし、感染が拡大している地域で、中高生の部活動が制限されたり停止となったりしている状況下では、多少のトラブルが生じて感染リスクのないオンラインでの活動が推奨されるべきですし、限られた条件でも創意工夫で意味のある活動にしていくことは大切です。

今後の展望

「ポスト・コロナ時代を見据えて…」という言葉

状況や変異ウィルスの発生を考慮すると、コロナ禍からの脱却がいまだに見通せません。それでもポスト・コロナ時代が来ることを期待して、模擬国連が再び対面で活動できることを楽しみに待ちたいと思います。その際には、オンラインでの模擬国連の経験がまったく無駄にはならず、対面型との併用になるのではないかと思います。というのも、2022年度からの新教育課程に合わせた高校地歴や高校公民の教科書の一部で、模擬国連が紹介されることとなっているからです。全国すべての高校が採択するわけではありませんが、対面型での会議に参加することが困難な地域からでも、参加を希望する高校生が今より出てくることが予想されます。手軽に会議を体験してもらうにはオンラインが欠かせません。居住地の環境に左右されることなく、高校生が模擬国連を体験するにはとても有効な手段だと言えるからです。

- 1 「もぎこみゅ！」のHPは、<http://www.mogicommu.com/>
- 2 BGはBackground Guideの略。議題についての現状分析や実際の取り組み、会議での論点などが記されている。
- 3 PPPはPosition and Policy Paperの略。担当国について、あらかじめリサーチした内容をまとめておくレポート。
- 4 Draft Resolutionの略。国連文書と同様の形式で作成される。英文で作成することが多い。
- 5 全国中高教育模擬国連研究会編、『高校生の模擬国連—世界平和につながる教育プログラム』、山川出版社、2019年。
- 6 <https://jcgcmun.org/>
全日本高校模擬国連大会を主催しているグローバルクラスルーム日本委員会のHP。模擬国連をはじめのあたりにノウハウやルールなど詳しい資料が閲覧できる。
- 7 全国高校教育模擬国連大会(AJEMUN)は、模擬国連に携わる高校の教員(中学も含む)が中心となつてはじめた大会。全国中高教育模擬国連研究会(全模研)が主催し、毎年全国から500～600名程度の高校生が集まっている。全国中高教育模擬国連研究会に入会を希望される方は、次のアドレスにご連絡ください。
ajemun2021@gmail.com
- 8 2020年秋ごろのZoomのバージョン・アップにより、参加者側の操作でブレイクアウトルームへの入退室ができるようになった。
- 9 「Let's MUN」のHPは、<https://letsmun.wixsite.com/letsmun>
- 10 大妻高校主催の会議は2020年6月14日、「Let's MUN」の会議は初心者議場が同年6月14日、経験者議場が6月28日に開催されている。なお、大妻高校の関孝平先生は、ご自身のHPで模擬国連をわかりやすく紹介している。
<http://maxclassroom.net/mun.html>
- 11 第5回大会も2021年8月にオンラインで開催し、全国から約600名の高校生が参加する大規模な模擬国連会議となった。詳細は以下の大会HPを参照。
<https://sites.google.com/view/ajemun2021>